

猪の瀬戸の歴史シリーズ④

野 焼 き



猪の瀬戸湿原全景 -鞍ヶ戸岳より- (1971-9)

戦後、放牧地として活用されてきた猪の瀬戸湿原は、毎年野焼きが行われ、その範囲は湿原域だけでなく、県道北側部分、東側の台地、西側の植林地を除く部分まで広範囲にわたっていた。

野焼きは畜産農家にとっては、家畜の飼料を得るために必要な作業で、城島高原の会社と城島、東山地区が協力して行っていたものと思われる。

左の写真は1971年に撮影されたものであるが、下の写真1、写真2（いずれも撮影年は、はっきり

しないが昭和30年代の頃と思われる）と合わせてみると、かつての猪の瀬戸湿原の状況をうかがい知ることができる。このころ水口山東側斜面にはまだゴルフ場はつくられていない。

その後、昭和40年代後半になって、畜産農家の高齢化、畜産形態の変化などで、野焼きは中止になり、植林地は拡大され、さらに度重なる城島川の氾濫で土砂が湿地内に搬入されて周辺部から森林化が始まっていた。

環境とそこに生きる生物とは相互に関係し、湿原が森林化すれば、そこに生育していた湿原植物は、消滅の危機に瀕することになる。



写真1 城島高原台地も野焼き



写真2. 猪の瀬戸湿原全面の野焼き

* 【写真1. 2. は (株) 城島オペレーションズの提供】